ひまだからではない。孫がおぢいちやまと遊びたがるからだ。そのくせ、遊びだすと、相手をする以上に身がはいる——「保育論の原稿を書いていらつしやるよりも、お骨がお利ましよう」と、側のものが笑う。たしかに、骨のおれる喜びだ。幼稚園主事をよしてから、直接幼児と遊ぶ先生方の疲れが分るといつては、遅すぎるかもしれない。喜びが今頃分つたといつては、遅くても結構ですと、いわれよう。

その孫の一人、三歳になつた男の子が、或る日おぢいちやまのおとうさまとおかあさまとの写真の前に、かわいゝ腰かけ一つで、お辞儀をしては、何か言つている。いゝおとうちやま、いゝおかあちやまの、いゝおとうさま、いゝおかあさまの、そのまた、いゝおとうさま、いゝおかあさまであるから、やゝこしい。たゞいつも、お菓子やくだものが、その前から自分に与えられるのだから、孫達は、神ちやまという言葉でよんでいる。そして、その時言つているのはこうだ。……「僕大きくなつたら学校に行きます」これは、一年生の姉が「私大きくなつたら病院の看護婦さんになります」といつたのに倣つたのである

「僕おもちやがありまちゆ。ブランコがありまちゆ。砂場がありまちゆ。お菓子がありまちゆ。リンゴがありまちゆ。ドウブ、(ぶどうのこと)がありまちゆ。神ちやま、どうぞおあがりくだちやい。……」そうして、ベコンと頭をさげた。

我々の祈りが、多く、こうして下さい、何を下さいであるのと違つてこの子の祈りは、自分の幸福の報告だ。要求でなく、祈願でなく、報告だ。ありのまゝの報告だ。その、その上結びが「ありがとうございます」でなくて「神ちやま僕の幸福を捧げます。」だ。物をでなく、自分の幸福と喜びとをだ。またしても孫に教えられる。

孫と遊ぶ

倉橋生

秋の保育應答研究会

一、十月十八日。
十一月十五日、十二月二十日
(いづれも第三土曜日)(午後一時半)
一、会場。フレーベル館講堂
来会随意。会費不要
一、講師。倉橋惣三先生

フレーベル館内
保育応答研究会係

幼児の教育 第五巻 第二号
定價 金五十円
昭和二十七年十一月二十日発行
東京都中央区千光前町一〇
編集兼発行者 倉橋惣三
東京都文京区大塚町三十五
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会
東京都板橋区志村町五番地
印刷所 凸版印刷株式会社
東京都千代田区神田神保町二ノ四
発売所 株式会社フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番
○本誌御購読について注文申込その他はすべて発賣所フレーベル館宛願います